

福島での医師たちの証言

東日本大震災後早や2年半を過ぎました。つい先達つての防災の日には、90年前に起きた関東大震災の実態と近々発生が予想される東南海地震と津波による恐るべき被害想定が報道されていました。

今日福島第一原発事故処理の見通しは全く立たずに、東京電力に替って国が腰をあげざるを得ない状況にいたっています。加えて放射線被ばくによる福島県民の健康と自然環境に及ぼす影響については未だ明らかにされてはおりません。そういったなか、福島第一原発事故発生によるメルトダウンの危機を知らされないまま、オフサイト・センター(現地対策本部医療班)で活動された数少ない医師たちの生々しい証言を紹介いたします。

彼等は日夜救急医療に携わりつつ防災(放射線被ばく対策)活動をしている数少ない専門家達ですが、原発事故発生直後に執られた彼らの行動は確かな情報を知らされないにも拘わらず、まず率先して現場に駆けつけ、喫急なことは何かを自ら問い、そこで自らできることを、数少ない集まった人達と協働して事にあたることでした。

「多くの医師や看護師が東北の被災地に赴き、支援活動に従事した。しかし、福島第一原子力発電所事故直後に被曝医療の支援を目的として現地へ向かったのは一握りの医師、看護師たちであった。彼らの医療活動にはこれまでにない多くの障壁が立ちはだかった。もし、将来、同じような災害が起きたとしたらどうするのか。福島の実験が生かされるのか。同じ轍を踏まぬようにしなければならない。そのために彼らの生の声を残しておかなくてはならない」と本書には福島で起きた現実と現地で活動した医師達の見たものを記録に残さねばならないという強い意志と責任感があふれています。因に、編者の谷川攻一先生は広島大学救急医学教授で、黒崎クリニック時代当直に来ていただいた先生です。

福島第一原子力発電所事故の医療対応記録

医師たちの証言

編者 谷川攻一、王子野麻代

へるす出版

平成25年9月6日

理事長 市丸喜一郎